

同志社同窓会と幼稚園

武間 富貴

あるおばあ様のお話

「昭和十五年に建てられた同窓会館と幼稚園舎が、老朽化し、時には危険が生じないとも限らない状態になったので、母校創立百周年の同窓会の記念事業として改築することにりました。同窓会の会員の皆様、幼稚園ご卒園の皆様!! 是非、改築のための募金にご協力下さい」という内容の手紙を同窓会からもらった卒園生であり且つなお、同窓生である八十四歳のおばあ様は、「私は明治三十年に出町枳形通りにあったアメリカ人のしていた出町講義所の中の日曜学校や幼稚園の評判がよいので行き度か

ったのですが、ちょうど、折悪く経済難の故に閉められたので、これに代って、今出川通りのラーネッド先生のお家で始められた今出川幼稚園へ通いました。沢山の思い出はありますが、ラーネッド先生(夫人)から「神様が常にお守り下さっていることと、神様にお祈りと感謝すること」を教えられ、この年になる迄、かたく守って来ました。又、私は、何と言っても同志社女学校で学ばして貰ったことは、一生の幸いでした」と目を輝かせて話しながら、「何分にも年寄のことですからネ」と言いながら、第

一号の捧げ物を何気なくして下さったのは、只々、感激であった。経済上の不運で余儀なく閉園した出町幼稚園や、このお年寄の通っておられた今出川幼稚園は、本当にすばらしい保育をしていた。しかし、これらの経営はアメリカンボードの補助のもとになされていたのにもかかわらず、経済的に恵まれていなかったことは残念なことであった。

デントン先生の熱意にほだされて

昭和十年の秋、アメリカンボードが、今出川幼稚園の経営を同志社に依頼して来たが、同理事会はこの件を同窓会にもって来られた。同窓会では慎重な協議の結果、「毎年金二百円程の補助金の必要がある」ということでは、何んとも私達には引き受けられない旨を返事したが、デントン先生が、過去二年間にわたって、細かく調査せられた結果を熱心に説明されたので、その熱意にほだされて「今出川幼稚園の経営」という大事業を引き受けることになり、松田道同窓会長が、園長に就任され、経理状態が正常になるよう努力された。



卒園式



取り壊し前の園舎

明治二十六年に同窓会が誕生発足して以来、度々、同窓会館建築の話があり、建築のための募金を始めたことや、デントン先生が「ご自分の邸宅を提供するから早く建てる」と言われて、先生と昵懇のその道の権威者武田五一京都帝国大学教授に設計図作製を依頼、それが早やばやと出来上がったこともあったが、いつも不成功に終わっていた。ところが、同窓会が、幼稚園経営を引き受けた時(昭和十年)の園舎は、大正初期に建てられた七十六坪の木造平屋建で、余りにも、お粗末な上、何の設備もないバラック同様のものであったので、たまたま、同窓会館を必要としていた同窓生の熱心な要望と新園舎の必要とが一致し、同窓会は、同志社理事会の承認を得て、昭和十五年、日華事変勃発の時であったが、バザー・音楽会・会員への募金等々、必死の努力で、建築費を作り、旧園舎跡に、木造二階建の新館を竣工させた。一階を幼稚園舎に、二階を待望の同窓会館として使用出来る望が叶えられたことは全く、神が祈りに答え給った故と同窓会の皆と共に心からの感謝を捧げた。

戦時下の会館及び園舎

新会館が出来たおかげで、同窓会は、諸講習会・種々の会合・宿泊と、各方面にわたって、活動することが出来、幼稚園も設備の調った新園舎で、最もよい保育が出来ることが喜んでいた矢先に、太平洋戦争が始まり、日増しに、戦時下の状態は危険を増して来たので同窓会も幼稚園も、一時閉鎖し、日本航空K・Kの陸海軍服のボタン付けのため、全館及び、園舎が、終戦迄使用された。

子供達の樂園が、戦争の犠牲になったことは誠に残念、且つ悲しいことであった。

同志社幼稚園となって

世の中が、やっと平和になって、同窓会は活動を再開、幼稚園も再び開園したところ、急に園児数が増加し、活気を取り戻して来たが、一方、人件費をはじめ諸物価が高騰し、諸経費が非常に嵩んで来た。折柄、同志社では諸学校の復興整備の動きが起って来たので、同窓会は昭和二十二年七月、幼稚園の経営を法人同志社へ返すこと



昭和10年頃の幼稚園

会が、その任に当たることになった。その後、同志社が、財団法人から、学校法人へ移行した際、園長は、教職員から選ばれることになった。

重要文化財の発掘

昭和十五年に同窓生達の努力によって建てられた同窓会館及び、幼稚園舎は、この四十年間、フルに活用されていたゆえ、いたみがひどく、又、不便・手狭になって来たうえ、耐震耐火について、その筋からの注意も度重なって来た。そこで、同窓会は、母校創立百周年を期に、同窓会の記念事業として、会館改築を決心し、同志社当局の了解を得て、同窓生へは勿論、各方面への募金を始め、色々と準備を懸命に進めて来た。

同志社ではこの機に、幼稚園を「同志社幼稚園」と改称し、正規の同志社教育の一端を荷う大事な幼児教育機関となったが、「幼稚園の管理監督は、今後も尚、引き続き同窓会によって行ってほしい」とのことであつたので時の同窓会長が初代の同志社幼稚園園長となり、園の事はこれ迄とおり、同窓

この会館の土地は、旧二条公爵邸の跡のこととして、文化財が埋没されている事は必至、そこで、同志社大学校地学術調査委員会の先生方や、実習の学生さん達によって発掘調査が四カ月にわたって行なわれたところ、弥生時代からの種々の貴重な文化財が、続々と掘り出された由、考古学上のお

役にたったことは何よりであった。ただこの工事中、仮園舎で不自由な保育を受けている園児達はかわいそう故、一日も早く工事に着工、新しい建物が建つ様にと願ひ、且つ、祈つて居る次第です。

大同志社に輝く小さい星

デントン先生によって誕生、ラーネッド先生によって育てられた出町幼稚園と今出川幼稚園を同志社幼稚園にまで継承発展させたのは、デントン先生の熱意に動かされた同窓会が、このむつかしい幼稚園経営をあのむつかしかった時代に引き受け、努力をおしまなかつたゆえと感謝し度い。

幼稚園は、大同志社中の一番小さい存在ではあるが、キリスト教主義による愛と熱情をもって保育にあたるという開園以来の伝統が今もなお、変わることなく続けられていることは何とも嬉しいことである。

(同窓会とは、同志社同窓会のこと、同志社女子部全卒業生の会名)

同志社同窓会名誉会長
同志社幼稚園名誉園長

中瀬古和さんの寒梅

竹 中正 夫

一九五九年は、日本にプロテスタントの宣教師が到来して百年になるというので各地で記念の行事がもたれた。京都では、基督教協議会によって同志社の栄光館を会場として催されたプログラムには二つの柱が立てられた。一つは、午前中には京都大学の高坂正顕教授と同志社の大塚節治総長によってそれぞれ、近代日本におけるキリスト教の足跡を回顧した講演がなされ、午後には、音楽、生花、舞踊、演劇によって日本におけるキリスト教信仰の表現をはかろうというものであった。

午後のプログラムのお花は、京都未生流の太田雅香氏（京都教会員）によって、キリス

ト教のテーマによる作品が栄光館の二階のロビーに陳列されて注目をひいた。演劇は、熊本バンドの物語と新島の自杖の場面を一つのストーリーにつなげて「寒梅」という脚本を大映の専門家に書いて貰って、同志社大学の学生有志が熟演した。踊りは、同志社女子専門学校の卒業生であり、日本舞踊の名取りである酒井式子さんが「しづけき河の岸辺」の讚美歌にあわせて優雅に踊って下さった。

音楽は、宣教百年を祝うにふさわしい歌をつくり、それを日本の作曲家に依頼して曲を作っていただき、当日合唱するという計画であった。作詩は、多少うたの心得があるとい

うので私の家内があたり、作曲は同志社女子大学の中瀬古和教授が担当し、合唱は同志社グリークラブが引きうけるということでした。それぞれ準備にかかった。万葉調の三部からなる「寒梅」の歌詞が出来上り夏休み前に中瀬古先生のもとにおとどけした。

とりわけ暑さのきびしい夏であった。中瀬古先生は京都を離れず室町のお宅にこもって作曲に余念がなかった。秋となってようやく爽風が交うようになったころ中瀬古先生は、十一頁からなる「寒梅」の楽譜を届けて下さった。自筆で丹念に一つ一つ記したものであった。それを複写してグリークラブに届けるのがわたしの仕事であった。そのとき、先生は、もう一度目を通して誤りを自ら訂正された。「律法の一点一画もおろそかにしない」という気概がうかがわれた。

やがて曲の練習に入ったグリークラブのマネージャーがいうには、あの曲はやってみたがとても手に負えないのでグリークラブは勘弁して欲しいというのであった。当時京都教会の副牧師をしていた岸本羊一氏（現横浜紅葉教会牧師・NCC議長）がみるにみかねて、京都近辺の教会音楽の同好者有志を集め



中瀬古和さん

てなんとか歌うようにときりぎりまで尽力して下さったが、実らなかつた。とうとう当日には、同志社女専出身の京都放送の岡崎アナウンサーに「寒梅」の詩を朗読してもらい、駕淵紹子氏にパイプオルガンで中瀬古先生の曲を弾いていただいた。満堂の栄光館の一隅で中瀬古先生はその音に耳を傾けておられた。わたしはその姿をみ、また、先生の胸中をお察し申し残念でならなかつた。折角お作りいただいた苦心の作品はどうとう歌われずに終わったのである。なかには、中瀬古先生の作品は難かしいから歌われないのだという人すらあつた。そうかも知れないと思つたが、

芸術の世界では一歩時代を先んじた人は必ずしも同時代者から理解されなかつたことがしばしばあることも忘れなかつた。ミレーやレンブラントは貧困のなかに世を去つていったし、ベートーヴェンも悲しみの中に生涯を了えていったのである。

それから数年して、一九六二(昭和三十一年)、わたしはヘンリー・ルース客員教授としてユニオン神学校に招かれた。そのとき、わたしはスーツケースの中に中瀬古さんの「寒梅」を入れた。当時ユニオン神学校には、宗教学院が併設されていたのであるいは、この曲を評価してもらう機会があるかと思つたからである。

ユニオンの日々は多忙をきわめ三ヶ月位はアツという間に過ぎて了つた。毎週水曜に食堂のバルコニーで教授たちが会食をする習慣があつた。そのおりに、日本人の作つた宗教音楽曲の評価をして貰いたいが誰に頼んだらよいかとたずねた。誰しもがあげる名は、タンジマン教授という名であつた。わたしは、しばらくして同教授に会い、中瀬古さんの「寒梅」の楽譜を渡した。約一週間して同教授から返事があつた。それによると、この曲はず

ばらしい旋律をもっている。作者は、東洋的な感覚と整つた近代音楽の特色を兼ね備えている人にちがいない。この曲が是非ユニオン神学校の礼拝堂でうたわれるように希望するという意味の手紙であつた。このことを伝え聞いたヴァン・デューセン学長のすすめによつて、チャペルで特別礼拝をやることになり、各方面に案内状が出された。ユニオンやジュリアード音楽院で学んでいた学生たちの間で特別の聖歌隊がつくられ、この曲の練習がなされた。当時ユニオンには日本人で宗教音楽を学んでいた人が少なくなかつた。オルガンは現在国立音大で教鞭をとつている吉田実氏、合唱は、現在立教女学院をはじめ武蔵野音大などで指揮をしている長谷川朝雄氏、ソプラノの独唱者としては、川村(半沢)悦子さんなどがいた。これらの人びとが仲間をあつめ、練習をつんで、「寒梅」をうたつて下さつた。

その日には、ジェームス・チャペルはバルコニーまで一杯であつた。「寒梅」は大きな感動を人びとに与えた。数日は、ユニオンのキャンパスでも、隣のインターチャーセンターでもその話がたびたび出たくらいであ



寒梅

宜教百年を迎えて

作詞 竹中 文字
作曲 中瀬古 和

一 懐古
山川は古りて清けく
平らけき大和の国は
御神のめぐみの園ぞ
太陽は光ただ照り
さはあれどその古ゆ
遠里のいばらの中に
愛みて育てし友よ

大空は広く美わし
母父の生れ継ぎし郷
ときわぎの緑豊げく
夕つ日は光たださす
山の辺の石路の上に
播かれし信仰の種
汗涙 忍苦の足跡を

った。
わたしは、「寒梅」のテープをもち帰り、中瀬古先生に「これ、ユニオンからの、おみやげです」といってタンジマン教授の手紙の写しとともに渡した。その翌日の朝、わたしの家のベルが鳴った。戸をあけてみると、中瀬古先生がそと立っておられた。「昨日のおみやげのお礼にきました」といって、花束を下された。僅か一巻のテープであったが、中瀬古先生にとっては深い感動をよぶものであった。そのテープは自国では歌われなかった

残し来し先なる人よ 聖言に固く據りて
榮え克ちし月日の重ね 百世歴て偲はむ吾等
心うれしも

二 苦難
賀茂の瀬の水の音清く 調なす千年の都
百磯城の大宮人ゆ 百伝う伝統の中に
新らしきを着たる若人 福音に魂ふれて
岩山も恐き海も 迫害の苦しき折も
冬の日雲を競いて 忍び咲く寒梅の如
愛故に 寛し祈りし 姿痛まし

三 希望
白雲の千重を押しあげ 天そそる高き比叡の

自作の曲がはるか海をへただてた異境の地で
見事にうたわれ、多くの人々に感銘を与えた
ことを如実に物語っていたからである。
(大学神学部教授)



山なみの小松が末も 御神の御意なくば
春風になどて匂はむ 御手により治す主は
天国の民とし給う 十字架の破れに立ちて
人の子の負目しる主は など来ぬと微笑招く
いざ吾等先人のごと 同胞に愛を捧げつ
新たなる真人となりて 共々にはげみ行かなむ
万世に継ぎ咲く梅花の 栄光の歴史の流れ
今ここに脈打ちてあり 主をばたたえて

返歌
百年をいや継ぎくりに咲き渡る
梅花の生命を遠く訪ねむ